

【課題番号】 4-1606

【研究課題名】

トキの野生復帰のための放鳥個体群・里山の管理手法と持続可能な地域社会モデルの研究

研究の全体概要

2008年から環境省によって佐渡島ではトキの野生復帰が実施され、2008年以降、毎年トキを放鳥することで「2015年までに佐渡島に60羽のトキを定着させる」という目標を2014年に達成した。2016年に公表された新しいトキ野生復帰のロードマップ2020では、「2020年までに佐渡島内のトキの定着個体数を220羽にする」とし、この目標達成には約350羽の生息個体数が必要となる。しかし、現状ではトキの野生個体群の増殖率は低く、放鳥によって維持されている状況である。真の野生復帰を実現するには、放鳥個体群の遺伝的構造を管理しながら、繁殖成績を改善し自立個体群を形成していく必要がある。本研究では、佐渡島のトキの環境収容力（生息可能な個体数）に影響を与える生態学的要因を解明すると同時に、未標識個体の家系を推定する技術を開発し遺伝学的構造を解明することで、トキの放鳥個体群を適切に管理する手法を明らかにする。また、現在の佐渡島の里地里山の管理手法や景観構造がトキの環境収容力に与える影響を明らかにすることで、トキの野生復帰を促進するのに最適な里地里山の維持管理手法を提案する。さらに、放鳥から7年が経過し、地域住民もトキへの関心が薄らぐとともに、個体数の増加によりトキの稲踏み被害を不安視する農家も増加している。トキに対する地域住民の意識の変化を明らかにし、稲踏み被害の実態を科学的に示すことで、地域住民との合意形成をはかり、将来にわたってトキと共存可能な地域社会モデルを提案する。最終的に、今後の高齢化・人口減少に伴う農耕地の放棄シナリオのもとで環境収容力を推定し、佐渡島において最小限の管理手法で長期的に維持できるトキの生息個体数を推定する。

【4-1606】トキの野生復帰のための放鳥個体群・里山の管理手法と持続可能な地域社会モデルの研究

(課題代表：新潟大学・永田尚志)

